

メダン研修を終えて

紙屋剛志

私は今回のメダン研修で様々なことを経験した。私にとって初めての海外は衝撃的で、普段日本にいるときには意識もせず考えもしないような多くのことを考えるきっかけとなった。そんな中、特に印象深く自分の心の中に残ったことがある。それは、海外の人々との交流の面白さと難しさである。

メダン市に派遣される前は、違う国の違う言語を話す見ず知らずの人と交流するということに対して、楽しみに思うよりも不安に思う気持ちの方が断然強かった。そしてメダン市に着いてから実際に現地の人とゆっくり話したのはホストファミリーとの対面式からだった。対面式からホームステイ先へ向かう車の中で私はとても緊張していた。なのでホストファミリーが私にいろいろ質問をしてくれたのだが、私は必要最低限のことしか返答せず、こちらから質問をすることはしなかった。そんな私をホストファミリーは心配に思っていたと思う。それでも私をいろんなところに連れて行って、どんどん話しかけてくれたおかげで私もだんだんと話すようになり、気が付いたら本当に家族のように接するようになった。別れるときには父親に「あなたは私の息子だ」と言ってくれるほどだった。

またメダン市滞在中は学生たちともほとんどの時間、行動を共にし仲良くなることができた。同い年くらいの学生たちが積極的に話しかけてくれたことで私の外国に対して身構えていたものを取り払ってくれたと思う。

はじめは喋るのですら緊張していたのに、気が付いたら親しくなっていることが面白いと私は感じた。それが海外の人と交流することの楽しさ、面白さなのだと思う。

しかしメダンの人との交流は楽しいことばかりではなく大変だったことも多くあった。特に言葉でのコミュニケーションの大変さである。現地では英語で話すのが基本で、ホストファミリーにも英語を話せる方がいた。特に父親は大学の教授であり、仕事で英語を使う機会が多らしく、ネイティブの人のように流暢な英語だった。一方、私は英語に自信があったわけではなく、何度も「Pardon?」と聞き直してばかりいた。でもその度にゆっくりともっと解りやすくなるように単語を変えたりしてくれた。そんな父親には特に苦勞を掛けていてどんなに感謝してもし尽せなく、私はその度に申し訳ない気持ちになった。

また、10日間の研修を通して英語の日常会話にはある程度慣れることができた。しかし、私はそれだけでは駄目だと思う。なぜなら人と本当に親しくするには自分の本心を話すことが必要だからだ。

同じ言語を母国語とする者同士なら比較的可能だが、違う母語・国の者同士になると途端に難しくなる。使う単語も難しいものになるだろう。

残念ながら私は今回の研修では自分の本当に思っていることを伝えることはできなかった。

出されたすべての料理に「good！（おいしい）」と言ってしまった。これは悪いことというわけではないが、本当においしいものからまあまあなものまで、とりあえずという気持ちで使っていた。

向こうに対する気遣いという面もあるが、他に言い方を思いつけなかったのも事実である。おそらく他にもいろいろな言い方があるのだろうが、自分にはそれしか言えなかった。

今回は 10 日間と短いものだったが、もしも将来、海外に住んで働くようなことがあればこのような英語力では不十分だと強く感じた。

これからは自分の思っていることを正確に伝えられるような語学を勉強していきたいと思う。そしてまたメダン市に行きホストファミリーと会ってもっと本当に思っていたことを話したいと思う。

この作文では主にメダンでの人との交流について考えたことだけを書いたが、ほかにも学び、感じたことはたくさんある。環境や価値観、宗教、文化、時間認識の違いなどを肌で感じる事ができた。将来再び海外に行く機会があれば、今回の研修で感じたことその国を視る上での物差しの 1 つとしたいと思う。最後にこの派遣でお世話になったすべての方々、ありがとうございました。

